

特集

北海道と名付けた旅人

松浦武四郎

北海道の名付け親、松浦武四郎。幕末の激動の時代、28歳で蝦夷に初上陸し、41歳までに6回の蝦夷地調査を行いました。武四郎が名寄を含む天塩川の内陸部を踏査したのは5回目の旅、40歳の時でした。今年には北海道命名150年、武四郎生誕200年の節目です。今回は武四郎の人物像やアイヌ民族とのかかわりなどに迫ります。

旅に出る理由

武四郎は1818年伊勢国須川村（現・三重県松阪市小野江町）で、村をまとめる役割を担う郷士・松浦家の第四子に生まれました。幼い頃から好奇心旺盛、知的な少年で、『論語』を学んで教養を深めると「中国、インドまで自分の目で見てみたい」と、16歳で家出をしました。1カ月ほどの家出でしたが、武四郎は旅の魅力を感じ、17歳から全国各地へ旅に出ます。

25歳の時に長崎で、蝦夷地にロシアの勢力が南下していることを知ると、いち早く蝦夷地のようにすを調べて人々へ知らせようと、28歳で蝦夷地へ渡り、そしてアイヌ民族と出会いました。

「記録の人」

武四郎の蝦夷地踏査は全6

回にわたり、1〜3回は個人として、4〜6回は幕府の雇人としての調査でした。武四郎の旅の道具は矢立（筆記用具）と書き留める和紙の野帳（はがきより少し大きいサイズの本モ帳）、方位磁石などで、アイヌ民族から聞いたことや絵、略地図を記録しました。それらをまとめて幕府への報告書を作成し、さらにその後改めて編集し直したものを日誌（紀行本）として出版しました。武四郎が他の冒険家と違ったのは、旅の記録を詳細に残し、アイヌ民族の存在を世に広めたことです。さらに、一般の人にもわかりやすく伝えるため、当時活躍していた画家や歌人に挿絵や和歌を寄せてもらい、多くの人の手に取ってもらえるように工夫をしました。日誌や地図

は全151冊にも及び、蝦夷地を知る貴重な資料になったほか、知識人の間でも評判になり、武四郎の名前は蝦夷通として知れ渡りました。

天塩川流域へ

天塩川流域の踏査は、5回目となる1857年40歳の時でした。4回目までは主に沿岸の旅が中心でしたが、5、6回目は幕府から内陸の地理調査の命を受けました。河口の天塩を出発し、ほぼ本流に沿って、約3週間で本流は天塩川上流、支流は名寄川上流まで丸木舟で遡上しました。

出発前の天塩では、米、みそ、こうじなどの食料と、鍋などの宿営道具や薬品を準備していたそうです。丸木舟は武四郎の乗る舟と、荷物用の2艇で、それぞれに案内役のアイヌ民族が乗り込みまし

広報 なよろ

平成30年
9月号
(No.150)

- 表紙 1
- もくじ 2
- 特集 松浦武四郎 2 - 3
- きらめくまちピト 4
- 声 - Voice - 5
- 御料線デマンドバス運行開始 6
- 健康ガイド 7
- フォトでお知らせ - 広報版 - 8 - 9
- 名寄市立大学の窓から
〜知への誘い〜 10
- もっともち米プロジェクト
なよろっばい家づくりの会 11
- 健やかな成長を願って
楽食講座を開催します 12
- 山形県鶴岡市を訪問しました
今月の手話 13
- EN - RAYホールイベント情報
ALTを紹介します 14
- 消費生活センター通信
男女共同参画社会の実現をめざして 15
- 施設のお知らせ 16 - 18
- 暮らしのお知らせ 19 - 23
- 裏表紙 24

松浦武四郎 × 名寄市

『天塩日誌』より名寄市の記録 6月25日(旧暦)

一生の失敗をしでかす。最初に泊まったとき、いたずらで「味がよく、強く、澄んだ酒は、塩を一つまみ入れると出来る」と言ってしまった。それを信じたニシハ(旦那)は仕込んだが、こんな酒ができてしまったと言われ、飲めば腐った酢のような味だった。これほど実直な人になぜこのようなうそを言ったのかと悔やんだ。



▲ナイフト(名寄市日進)

「武四郎まつり」に参加

武四郎が生まれた三重県松阪市で毎年開催されている「武四郎まつり」に、天塩川周辺11市町村で構成されるテッシ・オ・ペツ賑わい創出協議会(会長加藤剛士)で出店。各市町村の特産品などの販売を通じて地域のPRを行っています。



「テッシ武四郎カード」ができました

テッシ・オ・ペツ賑わい創出協議会の構成市町村11枚と松阪市の計12枚のカードが完成。それぞれの市町村で配布予定なので、ぜひ集めてみてください。配布場所などの詳細は、今後名寄市ホームページなどでお知らせします。



松浦武四郎(1818~1888年)

身長約150センチ。1日60~70キロ歩いて全国を旅した。71歳で亡くなるが、その1年前に富士山に登るほどの健脚の持ち主。

天塩川(名寄市智恵文)

た。「天塩日誌」には内陸のアイヌ民族が河口付近の浜へ出稼ぎを強要されていたなど、内陸のアイヌ民族の悲惨な状況が、幕府の批判になろうとも、ありのまま記されています。
加伊への思い
武四郎は音威子府村のアイヌ民族の長老・アエトモに「カイ」という言葉を教わりました。アイヌの通称である「カイナ」の「カイ」とはこの国に生まれた者という意味で、「ナ」とは、貴人をさす尊敬の言葉である。こう教わった武四郎は、のちに蝦夷地に詳しい第一人者として明治政府の一員となり、開拓使の役人として1869年7月17日、明

治政府に対し、蝦夷地の新たな名称として「北加伊道」を含む6案を提出しました。武四郎は「蝦夷地はアイヌの人たちが住む土地」という意味を込めたのです。
最終的に「加伊」は「海」となっており、同年8月15日に現在の「北海道」と命名されました。
共生を願って
武四郎は開拓使となって半年で辞任します。北海道の開拓に欠かせないこととして、松前藩を他の地域に移すこと、場所請負制(※)を廃止することを政府に求めたものの、認められなかったからです。その後、武四郎が北海道を訪れることはありませんでした。

武四郎はアイヌの人々との交流を深める中で、民族や文化の多様性を認め、共生を願いました。文化は違うけれど、同じ土地に住んでいる者同士、お互いに尊重しあい、生きていけばよいと訴えたかったのでしょう。
今年(2018年)は北海道命名150年、武四郎生誕200年の節目で注目されていますが、これからも歴史を知り、先人の思いに触れ、未来へつなげていくことが、私たちのなすべきことのひとつかもしれません。
※場所請負制 松前藩主や家臣が一定地域におけるアイヌとの交易を商人に委ね、運上金を受け取る仕組み。このもとでアイヌ民族の酷使が進んだ。